

赤ママ時代の“事故”の予防は、大人の責任です。

子どもは、生まれた瞬間から、どんどん育つていきます。できることが毎日少しずつふえていくなかで、興味もいっぱいの子どもたちは、裏返せば、大変な怖いもの知らず。たとえば、大人は刃物や調理中の鍋、薬や階段が、「一歩間違えれば」どんなに危ないものであるかを知っています。でも、子どもは、そうしたものの用途も使い方もまだわかっていません。どんなに危険かもわかりません。

子どもの場合、「危ないことをするつもり」もないまま、結果的に危険なことをする場合もたくさんあります。ベビーベッドの中に立って、足を上げたり下げたりしていたら、横棒に足がかかってしまって、頭がベッドの外に出て落ちる…。目の前にさがっている布につかまって、「立ち上がるぞ!」と力を入れたら、テーブルの上から熱いおみそ汁が降ってきた…。頭を打つつもりも、ヤケドをするつもりもゼロ。大人の事故もそうですが、子どもの場合は大人以上

に、「つもり」も何もなく、事故にあうのです。

ですから、赤ママ時代の子どもの事故を防ぐのは、大人の責任。「保護者だけの責任」ではありません。保護者だけでは守りきれないこともあるからです。社会が、企業が、子どものまわりにいるすべての大人が力を合わせることで、子どもの命を守る方法なのです。

特集

子どもの

「まさか!」で後悔

落ちる

—— 歩くようになったら、階段の上下やキッチンに柵をつけましょう。

—— までは、ベビーベッド。
・ 立ち上がれるようになったら、ベビーサークル。

・ 立ち上がれるようになる

は、
—— 家事などで目を離すとき

もちろんダメ!

風呂ぶたの上に寝かすのも、

だから」と入浴前に洗濯機や

は寝かせない。「ほんの一瞬

—— ソファや大人用ベッドに



窒息

— やわらかいふとんを使わない、ぬいぐるみなどを近くに置かない、うつぶせ寝をさせないことが重要です。

— ベビーベッドやふとんのまわりにひもやコード類がないかも要チェック。窓際のブラインドのひも、電気コードだけでなく、よだれかけのひもや服の飾りひもが、睡眠中、いつのまにか首に巻きついているということもあります。

溺れ

— 歩けるようになってから2歳の誕生日ぐらいまでは、風呂場での溺水が最も多い時期です。エコも大事ですが、残り湯をしないことが最善の策。お風呂の時間帯に、子どもがひとりで風呂場に入ることもありますが、風呂場のドアには必ず鍵をつけましょう。

— 子どもは水が大好き！でも、数センチの水さえ、子どもにとっては命取りになります。トイレは、ドアの上部に鍵を。庭にたまり水などがないかもチェックして。



命を守る!

しないために—

掛札逸美 (NPO法人 保育の安全研究・教育センター代表/心理学博士)



誤飲・誤嚥による窒息

— 口に入るものは、なんでも入れる時期があります。タバコ(吸いながらも)、年長児や大人用の食べ物、薬などはすべて「子どもの手が届かない場所」に置きましょう。

— 磁石は、胃や腸の中で胃壁や腸壁越しにくっついてしまつと、短時間でその部分に穴があき、気づかずにいると、とても深刻な状態になります。おもちゃなどから磁石がとれていないか、とれそうになつていないか、チェック!

— ボタン電池は、食道にひつかかると短時間で炎症を起し、食道の壁に穴をあけることもあります。玩具、体温計、リモコンなどの電池は、決まつた場所、下に箱などを置いて交換しましょう。落としたり、子どもが投げたりしたときに電池カバーが取れることもあるので、たとえネジがついていても、カバーはテープなどでとめましょう。リモコンは、ラップなどで覆ってしまうのも一手ですね。

— ティッシュペーパー、絵本(厚紙)、割れた風船、ラップなどを、どんどん口に入れていってしまうこともあります。

— 商品についているシールや、おもちゃのシールで窒息しかけることも。シールは先にはがし、年長児用のシールは赤ちゃんに渡さないこと、です。

— 服のかざりやボタンも要注意!

子どもと大人は、異文化

— 子どもの視点で世界を見ると、安全の発見もいっぱい —

ゴキブリだって こわくない

これは、とある小児科の先生にうかがった、年長さんのお話。でも、赤ママ時代にも十分に起こりうることです。

その子はある日、ゴキブリを駆除するあの「ゴキブリ〇イ〇イ」をなぜか口にくわえて、家の中を歩いていたそうです。ちょうど、ラップを吹くような感じですね。それを見たお父さんは、びっくり! 「何してるんだ!」と大きな声で怒りました。すると、その声に驚いたお子さんは…。なんと、中に入っていたゴキブリをゴックン、飲みこんでしまったのです。とはいつても、飲みこんだのはゴキブリですから、のどに無事(?)ひっかかり…。病院で取り除いてもらって事なきを得ました。

「するわけない!」は大人の思いこみ

「なんで、そんなものをくわえてたの!」「変な子!」「気持ち悪い～!」、そうお思いになりましたか? ちょっと待っ

⇒ おどかしちゃダメ! ⇐

ゴキブリの話は笑い話ですむかもしれませんが、実は、とても大事な教訓を含んでいます。「子どもが何かを口に入れているな」と思ったら、絶対に(!)大きな声を出しておどかしてはいけません。びっくりして飲みこみ、窒息死した事例もあります。とにかく落ち着いて、「何を入れているのかな? 出して見せて」とそおと取り出しましょう。口に入れているときだけでなく、子どもが危ない状況にいるときは、絶対におどかしてはいけません。



てください。小さい子どもにはまだ、「ゴキブリは汚い」「駆除しなければいけないもの」という知識はありません。そう考えてみると…。私が5年間暮らした米国コロラド州北部の町には、ゴキブリはいないのです。ちなみに、カブトムシもクワガタムシもセミもいません。だから、この地域の人たちにゴキブリを見せても、なんとも思わないでしょう。逆に、カブトムシやクワガタムシのほうが「変な角が出ていて…。何、これ、刺すんじゃない?」と言われそうです。

コロラド北部の人たちにしてみれば、日本は異文化。同様に、大人にとっても、子どもは異文化です。子どもたちにとっては、ゴキブリはこわくもないし、汚くもない。小さい子どもたちにしてみれば、トイレだって、楽しい水遊びの場。そう考えると、子どもの行動ひとつひとつが新鮮に見えてきませんか? そして、「そんなこと、するわけがない」と考える私たち、大人の目線そのものが子どもたちとはまったく違う、ということも。

生きている!



子どもの安全を守ることは成長を楽しむこと

「ダメ!」「やめて!」「何してるの!」「～しないで!」…、これでは、お母さんもお父さんも疲れてしまいますよね。特に、赤ママ時代の子どもたちはまだ言葉が理解できませんから、叱ってもすくんでしまうだけ。「よくわからないけど、怖い」という気持ちだけが育ってしまいます。保護者にも子どもにも楽しくない「禁止語」を連発するよりは、子どものそばに行って、手を添えて危ないものから離れさせ、わからないなりにもしっかりと静かに「これは危ないんだよ」「～しちゃダメなんだよ」と説明してあげてください。

一方で、「なんで、こういうことをするんだろう」と、子どもの育ちについてちょっと調べてみるのも楽しいこと。「な

んで泣きやまないの?」「どうして、なんでも口に入れるのかな?」「どうして、すぐにかんしゃくを起こすんだろう」…、乳幼児という「異文化」を体験できるのは保護者の方にとってもほんの数年のことですから、「なぜ?」をたくさん考えてみてください。わからないことがあったら、保育士さんや保健師さんにたずねてみましょう。

➤ 教えて! 保育士さん ◀

なぜ、なんでも口に入れるんですか? 「生まれて初めて口にするのは、ママのおっぱいです。抱かれて授乳をすることで、心地よさと安心感を受けとっているのです。だから、唇で心地よいものかどうかを確認しているんですね。離乳が始まると、乳以外の物を口にするようになります」。渋谷区福祉事業団本町きらきらこども園の庄司美香先生。20年近く、赤ママ時代の子どもたちを保育してきたベテランです。

「歯が生え始めるとムズムズするから、何かを噛みたい、というもありますね。1歳を過ぎれば、だんだん言葉もわかってくるので、『それはダメよ』とやさしく教えていってください。もし、何かを口に入れていたら? 「親御さんが『あーんして』と言いながら、口をあけてください。そうするとお子さんも真似して『あーん』します。または、子どもが好きなものを見せると、『あっ』と思ってお子さんは口をゆるめますよ」。

家庭訪問などに行くと最近の住環境も見え、家庭の中にあるさまざまな危なさにも気づくと、庄司先生。「子どもの成長と危なさは、裏表の関係。ぜひ、保育園やこども園、子育て支援センターの保育士にいろいろと尋ねてください」と話しています。



大人の心に住む、キケンな「過小」

—「うちの子は大丈夫!」という認知バイアス—

私の子どもは大丈夫

危険(リスク)の過小評価



人間は、「悪いことは、他人に起きてても自分には起きない。良いことは、他人ではなく、自分に起きる」と考える楽観バイアス(認知バイアス=「ものの見方のゆがみ」)を必ずもっています。この「自分」は、自分の子ども(対・他人の子)、自分の家族(対・他人の家族)、自分の職場(対・別の職場)、自分が住んでいる地域(対・別の地域)など、比較する相手に応じて変化します。

大人も子どもも“楽観的”

この認知バイアスをつかさどる場所が、前頭葉にあることもわかってきました。人類が世界じゅうに広がり、いろいろ

なものを発明してきた背景として、「自分(たち)には、もっといいことがあるはず」と楽観的になれる人たちが生き延び、遺伝子を残してきた歴史があるのでしょう。宝くじが売れるのも、当選確率など気にもしないで「今度は私が当たるはず」と思う気持ちがあるからです。私たちは大人も子どももみんな、楽観的なのです。

けれども、安全に関しては、この楽観バイアスが裏目に出ます。「私の子どもが(大きな)ケガをするわけがない」「うちの子がそんなことをするわけがない」と、つつい思ってしまうからです。危険(リスク)の過小評価です。

「大丈夫」のそのあとに

赤ママ時代の子どもたちも、このバイアスの危険にさらされています。「届くわけがない」「登れるわけがない」「開けられるはずがない」…。ところが、引っぱるつもりもなく、テーブルクロスを引っぱったら、危険なものが落ちてきた(誤飲、ヤケド、切り傷など)。たんすの引き出しを開けて、1段目に足をかけたら、2段目にも足が届いてしまった(転落、たんすごと倒れるなど)。窓の鍵を引っぱったり押ししたりしていたら、開いてしまった(転落、行方不明など)。子どもたちが、思いもよらないことを「できてしまう」例は、保育園のようにたくさんの子どもを見ている場所では、よく聞かれる話です。

子どもにはケガをするつもりも、させるつもりもありません。成長の過程のなかで「できるようになる」、または「ど

「評価」と「過大評価」

ういうわけかわからないけど、たまたまできてしまう」「してしまう」だけなのです。「うちの子はしないから」「できないから」は、楽観バイアスゆえに保護者がどうしてもしてしまいがちな、危険な考え方のクセです。「よし、そう考えないようにしよう」と思っても、脳に埋めこまれている機能ですから、簡単になくすことはできません。ですから、「うち

の子は大丈夫」と思ったら、次に「でも、万が一ということもあるから」と考える習慣をつけてください。そして、「万が一」のための行動をとるクセをつけるのです。たとえば、つかまりながら立ち上がるあいだはクロス類は使わない、棚にはチャイルド・ロックをかける、窓には、高いところに補助錠をつける、などです。

私の子どもは大丈夫

子どもの能力の過大評価

もうひとつある「私の子どもは大丈夫」は、「待っててね」「そこにいる」「動いちゃダメよ（自転車の補助椅子などに子どもを残したまま、コンビニに行くときなど）」と言えば、子どもは言うとおりにできるだろうと思う、子どもの能力の過大評価です。

大人の前頭葉が完全に成熟して、かなり合理的にもの考えられるようになるのは、20代の半ばごろです。では、幼児は？ 赤ママ時代の子どもたちは？ …まったく無理です。子どもは判断力も思考力も未発達。視野も運動神経も未発達。



興味をひくものがあれば、すぐそちらに行ってしまいます。

お兄ちゃんお姉ちゃんに任せないで

もちろん、赤ママ時代の子どもたちに「待っててね」と言う親御さんはいないでしょう。そうではなく、この「能力の過大評価」は、年長のきょうだいがいるときに問題になることがあります。たとえば、小学生ぐらいのきょうだいに、「〇〇ちゃん（赤ちゃん）を見ててね」と大人が言う場合です。見守れるのでしょうか…？ 大人だって、不注意とうっかりのかたまりです。子どもが見守れるはずはありません。実際、きょうだい別のことに気をとられているうちに下の子が溺れたケースや、きょうだい大人まねをして赤ちゃんに物を食べさせ、窒息したケースがあります。



大人も不注意な

—「まさかの万が一」に備えておく—

「私が子どもを守る!」、でも、 「万が一のとき…」

親御さんは、「自分の力で子どもを守る!」と思っています。私は「そんなことできないよ」と言っているわけではありません。どんなに頑張ってみても、人間が人間であるかぎり、「一瞬目を離れたすきに」や「うっかり〜したときに」、子どもの深刻な事故は起こる。そのときのための対策は、社会全体で立てておかなければいけない、とお伝えしたいのです。

人間は集中力、注意力が長続きしない、うっかり者です。最近では「マルチ・タスク型」と呼ばれる、いろいろなことを一度にできる人もいるようにいわれていますが、心理学の実験からは、人間にマルチ・タスク型はありえないということがわかっています。一度に並行して違う作業をしようとすると、集中力も効率も非常に下がるのです。

注意力を奪う“スマートフォン”

一方で、現代社会には、人間の注意力を奪うものがたくさんあります。たとえば、スマートフォン（スマホ）。画面に表示される情報量が圧倒的に多いスマホは、従来の携帯よりもずっと、人間の注意力を奪うことがわかっています。

米国でのお話ですが、友だちの2歳の息子さんをプールサイドで見守っていたAさんが「20秒ぐらいスマホでメールを打っている間に」（Aさん談）、その子が溺れてしまったのです。でも、監視カメラには、Aさんが3分間以上、画面に見入っている様子が記録されていました。この事例では子どもは無事でしたが、別の事例では、保護者が庭でTwitterに写真を載せている5分間に2歳の子どもがプールに落ち、死



亡しています。

スマホや携帯、あるいはパソコンでメールを打っていたり、ネットで何かを読んでいたたり…。「え、もうこんなに時間がたっていたの?」「あれ? 子どもが泣いてる!」と思った経験は、皆さんにもあるでしょう。スマホや携帯、パソコンが人の注意力、時間感覚を奪うものであることは、認知心理学の実験からもわかっています。「子どもに何か起きたら、すぐわかるから大丈夫」と過信するよりは、「(大丈夫だと思うけど)万が一、気をとられているうちに何かあったら困るから」「スマホより、今は子どもといっしょに遊ぼう」とわりきって、子どもと遊ぶときにはスマホや携帯を持たない。そんなふうにはほんのちょっと考え方を変えてみるだけで、大きな事故を防げるかもしれないのです。

うっかり者

「鍵かけたかな？」 声出し指さし確認を

意識をしても行動は変わらない。これも人間の特徴です。「～しなくちゃ」と思っても、なかなか実行には移せない。実行に移しても続かない。思いあたるがたくさんありませんか？ 子どもの安全も同じです。いくら「気をつけなきゃ」と思っても気をつけられない、健康心理学の視点からみると、それこそが人間なのです。

ですから、万が一のことが起きたときに深刻な結果につながりそうな場所（浴室や窓、玄関の鍵、薬などが入っている棚のチャイルド・ロックなど）は、声出し指さし確認をしましょう。指をさして（または鍵に触れて）「鍵かけた」「閉めた」と声に出すだけです（これは不安／強迫神経症にも効果のある方法です）。指をさしている自分を見、自分の声を聞く、これは間違いなく確認をするための基本です（鉄道会社の人



たちが声出し指さし確認をしているのには、ちゃんとした意味があるのです！）。

そして、子どもの安全を守るためには、まわりの大人もしっかり巻きこみましょう。赤ママ時代の子どもたちを連れていく親御さんには、まわりの人たちの目が集まります。危ないことに気づいた人は、「あ、危ないよ」「こうしたほうがいいよ」と言ってくれるかもしれません。「よけいなお世話！」と思わないで、そうした声にも、ぜひ耳を傾けてください。「言ってよかった」と思ったら、その人は次のときにも赤ママを助けてくれるかもしれません。

「子どもの安全は保護者の責任」。そうは言っても、親御さんにも「つい」「うっかり」「一瞬、目を離したすきに」は必ず起こります。周囲のみんなで声をかけあい、子どもたちを見守りあう。そうやって、「子どもの命を守る輪」を作っていきましょう。



掛札逸美 (かけふだ・いつみ)

1964年生まれ、筑波大学卒業。心理学博士（2008年コロラド州立大学大学院）。NPO法人保育の安全研究・教育センター代表。安全・健康の心理学、リスク・コミュニケーションなどを専門とし、子どもの傷害予防に関する「楽しく、わかりやすい」講演を多数行っている。独立行政法人産業技術総合研究所デジタルヒューマン工学研究センター特別研究員を経て、2013年にNPO法人保育の安全研究・教育センターを設立。主な著書に『乳幼児の事故予防—保育者のためのリスク・マネジメント』（ぎょうせい）、『人と組織の心理から読み解くリスク・コミュニケーション—対話を進めるリスクマネジメント』（日本規格協会）など。

製品の危なさ、伝えてください

人間は「うっかりする生き物」ですから、安全の基本は、まず製品や安全から、命を奪うような危なさを取り除くこと。日本では、まだまだ進んでいない分野です。

「この製品、子どもには危ない！」「ケガをしたよ！」という時は、企業や消費者庁、経済産業省にどんどん伝えてください。あなたのひと言が、次の深刻な事故を防ぐかもしれません。

消費者庁「子どもを事故から守る！
プロジェクト」

<http://www.caa.go.jp/kodomo/>

経済産業省
「キッズデザインの輪」

<http://www.kd-wa-meti.com/>